

ひまわりプロジェクトでつながる、ひろがる

鵜飼 節夫（三重県一志郡嬉野町立中郷小学校）
岸本 直樹（京都府京都市立有濟小学校）

1. はじめに

「ひまわりプロジェクト」とは、宮崎大学と同教育文化学部附属小学校による「全国発芽マップ」を母胎とする、スモールプロジェクトの1つである。北海道の食用油用ひまわりの種子を全国の希望校に郵送し、一斉（同日同時刻）にまき、発芽や成長についての情報交換、学校間交流、「ひまわり」を素材にした様々な活動を通して子どもを育む、「全国発芽マップ」のノウハウを生かした企画である。中郷小学校が幹事校、有濟小学校が副幹事校をつとめた。

2. ひまわりプロジェクトのねらい

近年、全国発芽マップにおいて「ケナフ」を共通素材に全国規模の取り組みが展開し、学校間ネットワークがつくられ、様々な活動の中から数多くの成果が得られた。昨年度から、ケナフの成長を報告し合う活動から、ケナフを「食」と結びつけた取り組みや、「工作・紙づくり」の素材として用いる取り組みなど、ケナフを活動の基点に用いる新たな取り組みが生まれてきた。また、ケナフ以外に、以前発芽マップで育てられていたことのある「綿」を育てる取り組みも復活した。

本年度から、全国発芽マップ参加校であれば、だれもが幹事校となり、育てたい植物を選択し、一緒に育てたいという学校と協働して育てることができる「スモールプロジェクト」が実現した。全国の子どもたちが比較的簡単に育てることができ、子どもにとって身近で親しみのある植物「ひまわり」を共通素材にした「ひまわりプロジェクト」を企画した。

このプロジェクトのねらいは、次のようなものである。

- (1) 同日同時刻にまいた、ひまわりの種子の発芽、成長の様子についての情報を交換する。
- (2) 参加校の提案で、ひまわりに関する様々な取り組みを企画し実施する。
- (3) ひまわりプロジェクトを起点として、参加校が独自の活動を展開する。

つまり、子ども間・学校間のネットワーク、インターネット上の掲示板、情報機器等を生かして、子ども主体の活動の源である子どもの思いや願いに沿いながら、様々な学習活動をつくりだすことにある。

ひまわりプロジェクト参加校は計81校（大学、教育研究所等も含む）である。発芽マップメーリングリストや筆者の所属する他のメーリングリストで参加を募った結果、スモールプロジェクトの中で最も参加が多いプロジェクトになった。

中郷小4年生児童9名が、全国から届いた種子の請求に応え、種子とメッセージを郵送して活動が始まった。



3. ひまわりプロジェクトの活動について

<全国横断的な取り組み>

参加校間で話し合い、4月25日午前10時が第1回全国一斉種まきの日（参加校の事情を考え、5月17日、6月17日の計3回の種まき）に決定した。ちょうどその頃、参加校間で、このプロジェクトでどのような活動を期待するかについて意見を交換し、以下のような見通し（子ども・参加校の実態で変更）を持つことができた。

- ・ひまわりの発芽までの日数と、発芽後の成長の様子を「ひまわりプロジェクト掲示板」で伝え合う。
- ・収穫した種子をいって食べたり、種子の中身を使った調理・お菓子づくりをしたりする。
- ・収穫した大量の種子を絞って、ひまわり油をとる。
- ・ひまわりの茎や皮から紙をつくったり、種子を使って作品をつくる。
- ・収穫の際の1株から取れた種子の多さ（重さ）、ひまわりの背の高さを競争をする。

第1回種まき後の掲示板には、各校からその様子がわかる画像とともに、「カウントダウンしてみんなでまきました」「種まきする畑作りからがんばりました」「早く芽が出ないかな」という書き込みがあった。数日後、今度は、「発芽したよ」「みんなで水やりをして大切に育てます」という発芽の喜びが綴られていた。

参加校の子どもたちの提案で、種まきからちょうど50日目のひまわりの背の高さを競い合う「ひまわりコンテスト」を実施した。子どもたちは、順位を競い合う楽しさを味わうだけでなく、どうして成長に違いができたのかを考えるようになったり、同じひまわりを育てているという協働意識をより強く持ったりすることができた。その後も成長に関する報告が続ぎ、開花の報告も相次ぎ、きれいに咲いたひまわりの花を見合った。

収穫期を控えた頃、ひまわりの種子が鳥によって食べられるという被害が、全国的に報告された。各校で対策を考えたり、今後の活動の見直しを変更したりする必要に迫られた。

しかし、この問題が契機となり、その後の参加校の活動において、事前にプロジェクトの活動内容を参加校全体で相談して取り組むという姿勢から、参加校が個々につながりをつくっていき、その間で、「ひまわりプロジェクト内ミニプロジェクト」とも言うべき、学校間プロジェクトに取り組んでいこうとする姿勢に変わっていった。

< TV会議を活用した取り組み >

TV会議システム（フェニックスミニ）を有する、中郷小、有済小、伊野小学校（高知県）、大島小学校（宮城県）、神明小学校（三重県）の5校で、ひまわりの情報を交換したり、自己紹介・学校紹介、各校の総合的な学習の内容を報告し合ったりして、交流学习を発展させていった。交流校間の活動の進展には、担任同士の結びつきがあった。

TV会議の中で、中郷小から、地域のお年寄りと協働してひまわりを育てた活動や、地域のひょうたん名人とひょうたんを育てた活動、収穫したひまわりの種子を使ってつくった「ひまわりクッキー」を交流校や地域のお年寄りに贈る活動、ひまわりの種子をつけて飛ばした風船から始まった交流活動などについて報告した。子どもたちは、TV会議を重ねていく中で各交流校の取り組みがわかり、自分たちの活動にそれぞれの活動を取り入れていく姿が見られるようになった。

1学期末、有済小が取り組んでいる「スローフードプロジェクト」の中で育てた「京野菜」が中郷小に届いた。また、秋、有済小の子どもたちが「聖護院大根」を育て始めたことを知った中郷小の子どもたちは、地域の農家の指導を受け、地域の特産「嬉野大根」を育てた。そして、収穫した大根を有済小をはじめ各交流校に送る活動に取り組んだ。そして、さらに、その送料をつくるため、町内のスーパーで大根を売る「販売体験」など、様々な活動につなげ、ひろげることができた。

伊野小は、地域で盛んに行われている「紙づくり」を題材に、「伝統工芸プロジェクト」に取り組んでいる。中郷小の子どもたちも、伊野小が紙すき、色染めした和紙を使って「ちぎり絵」を体験した。

大島小でも地域の食材に焦点を当てた取り組みが行われていて、中郷小に新鮮なマグロ、収穫した米、宮城特産のひまわり食品など、様々な食材が届いた。

TV会議交流校の中で、中郷小と唯一の同県校である神明小からは、地域の特産さつまいもを使ってつくった「きんこいも」が届いた。このとき、神明小の担任が直接中郷小を訪れ、子どもたちと対面することができた。

また、TV会議は「有済 大島 中郷」と「伊野 神明 中郷」の2つの3校間ネットワークごとに、それぞれの3校が相互に実施するようになり、TV会議の内容に深まりやひろがりが見られるようになった。

< 「face to face」による交流 >

交流校の中でも最も深いつながりを持つ有済小と中郷小とは、2回の直接交流が実現した。1回目は、有済小4名の子どもたちが、夏休みを利用して中郷小を訪れ、中郷の食材を使った料理、ひまわりクッキーを一緒に作り、おやつタイムには、中郷小の子どもたちの家へのミニホームステイを体験した。有済小の子どもたちは、京都にはない自然の良さ、中郷の友だちの家庭の雰囲気を感じることができた。

その後、有済小へ訪問したいという思いを強めていった中郷小の子どもたちは、有済小公開研究会当日に2回目の対面を実現させた。有済小の子どもたちが、料亭の人から教えてもらった「京都風お雑煮」を一緒につくった。この雑煮には、中郷から持っていった「嬉野大根」と「おもち」も使った。さらには、両校の共通の交流校である玉沢小（宮城県）や大島小からとどいた「おもち」と「かつおぶし」も使い、交流の味を味わうことができた。

昼食後、「有済 大島 中郷」3校による合同TV会議の公開授業にも取り組んだ。



4. おわりに

子どもたちは、「ひまわりプロジェクト」によって活動する楽しさ、人とつながる喜びを味わい、自分たちの思いや願いを実現していくことができたのではないだろうか。今後も、スモールプロジェクトが、子どもたちにとって、どのような活動の場になればよいのかについて考えていく必要がある。同スモールプロジェクト参加校間、スモールプロジェクト間のネットワークが、より確かなものとなり、そこから様々な活動が生まれてくることを期待したい。